研究ノート

ヘレニズム・ローマ時代のフタ
―パレスティナからの出土例について―

牧野 久実

Analysis of Lids from the Hellenistic and Roman Periods in Palestine

Kumi MAKINO

ユダヤ民族の口伝律法、ミシュナには器の内容物を穢れから守るとしてフタの重要性が記されている。そこで本研究ではパレスティナから出土したヘレニズム・ローマ時代のフタの特徴や変遷を発掘報告書から整理し、ミシュナの記述を参考にしながらフタの意味を使用者の観点も含めて考察する。

研究の結果、フタの型式や数がヘレニズム時代末～ローマ時代に増加すること、そのいくつかはミシュナに記された少なくとも３種類のフタに相当する可能性があることが示された。また、当時の人々がフタと器を見分けることの重要性を認識していたことや、例外的に断片をフタとして利用したことなど、今後フタの研究を進めるうえで新たな課題や解決のための糸口を得ることができた。

キーワード：ミシュナ、フタ、パレスティナ考古学、穢れの概念

This paper discusses lids (also covers and stoppers) from ancient Palestine mainly associated with the Hellenistic to Roman Periods. Lids have been treated as part of vessels and have not been studied seriously by archaeologists. However, *Mishna*, the oral Torah compiled in the 2nd century in Palestine, indicates that lids were important in protecting the contents of the vessels from contamination.

The author created a database to detail the typology of lids in the archaeological finds from Palestine. The results indicate that the variation and numbers of lids increased from the end of the Hellenistic to the Roman Period. Analysis of *Mishna* shows that several kinds of lids were used, and some of these fit well with the archaeological record.

Mishna details the significance of lids from a Judaic viewpoint and this study provides further understanding of Jewish dietary customs and the distinction between clean and unclean.

Key-words: *Mishna*, lids, Palestine archaeology, uncleanness

Ⅰ．研究の目的

パレスティナ考古学の土器研究において、フタは単に器の附属物としての扱いしかされてこなかった。フタを主題とした研究はこれまでになく、型式や編年さえ明らかにされてこなかった。

一方、紀元２世紀頃にパレスティナで編纂されたユダヤ民族の口伝律法ミシュナ（Mišna）には、器の内容物を穢れから守るフタの重要性が繰り返し記されている。ミシュナは種子の巻（農作物に関する法）、季節の巻（安息日と祭りに関する法）、婦人の巻（結婚と離婚、隣人に関する法）、損害の巻（市民の商売と刑罰）、聖物の巻（神殿の祭儀に関する法）、清潔の巻（祭儀的な潔・不潔などに関する法）と全６巻から構成され、フタについては清潔の巻の器に関する項目（ケリーム〔Keliim〕篇）や清潔に関する項目（トホロート〔Tohorot〕篇）、手の浄化に関する項目（ヤダイム〔Yadaim〕篇）、季節の巻の安息日に関する項目（シャバット〔Šabat〕篇）を中心に散見される。ミシュナはユダヤ民族がローマとの２度の戦争によって壊滅的な打撃を受けた後に成立した庶民生活を律するための指針である。ユダヤ民族の穢れの概念と石製容器の関連性についてはかねてより論じられており（Magen 2002）、他の考古資料についても注目されつつある（Finsy and Strange 2015; 牧野 2016a, 2016b）。

本研究では、まずパレスティナの 13 遺跡から出土したヘレニズム・ローマ時代の土器片およそ 6000 点を含むリレーショナル・データベースを発掘報告書から構築し、これを

© 日本西アジア考古学会

もとにヘレニズム～ローマ時代のフタの変容について分析・考察する。次に、ミシュナの記述からフタの役割や種類について整理し、考古資料との関連性や課題を導き出す。

なお、考古資料としてのフタもしくはセンは「蓋」、「栓」などと表現されるが、「蓋」は「器物に蓋をする形で、その上部をさらにちがやの類で屋を覆う」(白川 1984: 102) 様子を示す。また「栓」は木製の意味を含む。本稿においては土器製のものを対象とするため一般的な蓋や栓についてはカタカナで「フタ」と表現し、必要に応じてより実態に則した用語を試案として用いる。

ミシュナの和訳を引用する際には既存のもの(三好 1997; 石川 1987; 石川・三好 2003; 長窪・石川 2005)を基本としながら、必要に応じて10世紀もしくは11世紀と現存する最古の写本であるカウフマン・コデックスA50 (The Hebrew University in Jerusalem) を中心にアルベック版 (Kline 2005) とマイモニデス版 (Mechon Mamre 2002) を参照し、アルファベット表記した原文とヘブライ語原文を含む表を添付した(表4、5)。ヘブライ語のカナ表記法は日本ユダヤ学会ヘブライ語カナ表記委員会による統一見解に(日本ユダヤ学会 2007)、アルファベット表記はカーンらが編集した辞典 (Khan et al. 2013: I-xiii) に従った。

Ⅱ. 研究の基本となるデータベースとそこから得られるフタの傾向

構築したデータベースは一件のデータを複数の属性の値の組として表現し、組を列挙することでデータを格納していくリレーショナル型データベースである。今回はファイルメーカー (FileMaker Pro 12) というソフトを用い、各遺跡から出土した土器の図面を中心に、その器種、型式、遺跡名、時代、出土層、報告書名、報告者名といった付随するデータを1枚のカード内に整理し、遺跡や遺物間の相違点や類似点を一目で把握できるよう工夫した。器種の定義などの関連情報については各遺跡の発掘調査報告書のデータをそのまま入力した。

平成25年度から27年度の計3年間で地中海沿岸部のアポロニア、ミハル、ゼロール、ユダ地域を中心とした南部パレスティナのイェルサレム、ケイヤファ、ヒズマ、マサダ、イェリコ、マレシャ、ヘロディウム、北部のアナファ、ガリラヤ湖東岸のエン・ゲヴ、ガリラヤ地方のセフォリスと、計13遺跡からの土器片5776点について入力を終えている(図1)。遺跡の年代についての相関関係は表1に示したとおりである。これらは大きく①ペルシア時代末～前期ヘレニズム時代、②前期ヘレニズム時代、③後期ヘレニズム時代、④ローマ時代、⑤ヘレニズム時代全体に分類される。このうち、⑤は前期と後期が区分されていない。

データベースにはパレスティナ各地の遺跡を含めるように努めたものの、全てを網羅できているわけではない。時代別ではヘレニズム時代が約6割、ローマ時代が約3割、ペルシア時代末～前期ヘレニズム時代が約1割、地域別ではユダ地域と北部が大半を占めており、シェファラと地中海沿岸部(北部)はそれぞれ1割未満である(図2-1)。このような偏りを踏まえたうえでフタの分布状況を検索すると、いくつかの点が注目される。まず、フタの時代的分布はローマ時代がヘレニズム時代の約3倍と、遺物全体の

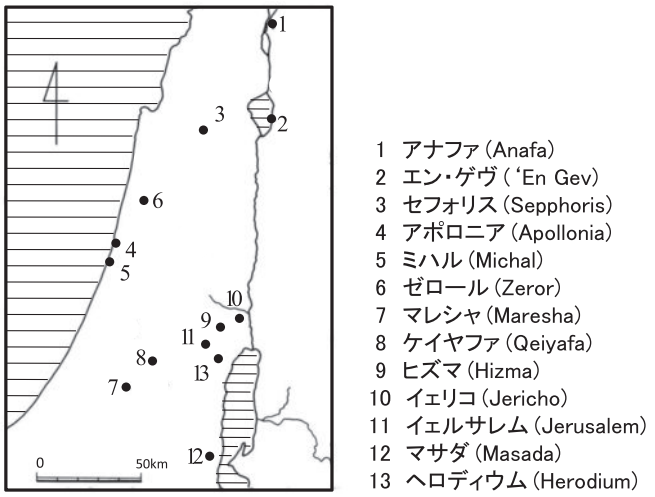


図1　データベースに含まれる遺跡

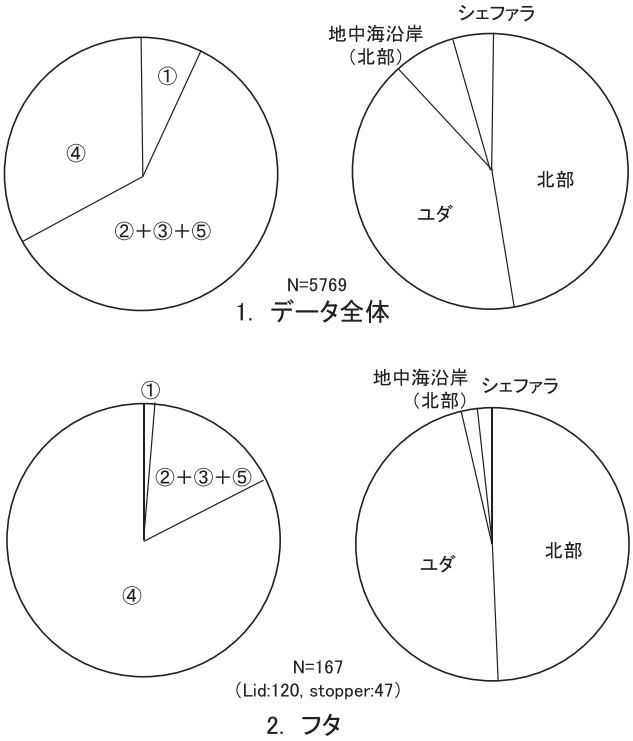


図2　データベースに含まれる遺物の時代(左)と分布域(右)

表1　データベースに含む遺跡とその時代区分

遺跡名（個体数）＼時代		① Per 末～EH ② EH	③ LH	④ ROM		参照文献
		（⑤＝H）		（ER）	（MR）	
1	アナファ（1186）	HellC2（98-75BCE）		ROM1A（end of 1st BCE）	ROM1B（Early 1st CE）	Herbert 1997
2	エン・ゲヴ（971）	III	II	I		牧野 2009, 2011, 2016c
3	セフォリス（545）		LH	ER1（1-70CE），ER2（70-135CE）	MR（35-300CE）	Meyers & Meyers 2013
4	アポロニア（119）	late 4th to mid-2nd/1st BCE				Roll & Tal 1999
5	ミハル（54）	V	IV	II		Herzog 1989
6	ゼロール（263）	V	IV-I	ROM		大畠ほか 1966-70
7	マレシャ（176）	3rd/2nd BCE				Kloner 2003
8	ケイヤファ（107）	III				Garfinkel & Ganor 2009
9	ヒズマ（61）			Cave1（1CE）		Magen 2002
10	イェリコ（555）	Has1（100-95/85BCE）， Has2（85/75-31BCE）， Hero1（31-15BCE），Hero2（15BCE-6CE）		Hero3（6-48CE），（48/70-135CE）		Bar-Nathan 2002
11	イェルサレム（818）	X2-St.7	X2-St.6-4	A-St.6-4（1BCE & 1CE）		Gava 2003
12	マサダ（764）	Hasmonian	EHBM & MHBP（31-15BCE） LHBP（15BCE-6CE）	Garrison（6-48 & 48-115CE）		Bar-Nathan 2006
13	ヘロディウム（157）			Phase 1（37BCE-48CE）	Phase II（48-70CE）	Porat et al. 2015

比率が逆転するほどローマ時代に集中している。また、フタはユダ地域と北部により集中している（図2-2）。この傾向は遺物全体にも見られるが、フタの傾向はより大きい。

考古学者は共伴する明確な事例を除いては、安定しない小さなもしくは歪んだ底部を有する器をフタと判断する。しかし、実際には類似の器が鉢として報告されているケースも多く見受けられる（表2 口縁部が上向きのもの）。上記の分析には鉢として報告されているものは加算していないが、今後鉢とフタがより明確に分類されれば遺物全体に対するフタの割合はさらに増えるであろう。

ローマ時代にはフタの型式が浅手のものから深手のもの（いずれも英文報告書ではLidと記される）、器の口内に詰め込むもの（英文報告書ではStopperと記される）と、それ以前に比べて多様である。器の口内に詰め込むものとしては未焼成の粘土を大まかに丸めたボール状、駒状、楔状、ディスク状がある。ボール状や駒状はアンフォラや壺に、楔状はウンゲンタリウムのような小型の香料瓶用と考えられている（Bar-Nathan 2006: 214-217）。実際、楔状のフタが小瓶と共伴する事例がある（セフォリス；Meyers and Meyers 2013: 79, Plate 11.9）。ネジのような形状で断面が逆T字を呈するものも珍しい事例としてマサダから報告されている（Bar-Nathan 2006: 224, Plate 37.45）。ディスク状で上部にツマミが付くフタはイェルサレムとマサダから28点出土している。径は8-10 cm弱だが、中には5 cmほどの小さなものもある。厚みは約2 cmを中心に中には約5 mmと薄手のものも見られる。ツマミは円筒状から紡錘状まで様々である。上面には凹凸模様や文字が刻まれる。その直径からアンフォラ用との解釈もある（Bar-Nathan 2006: 217）。

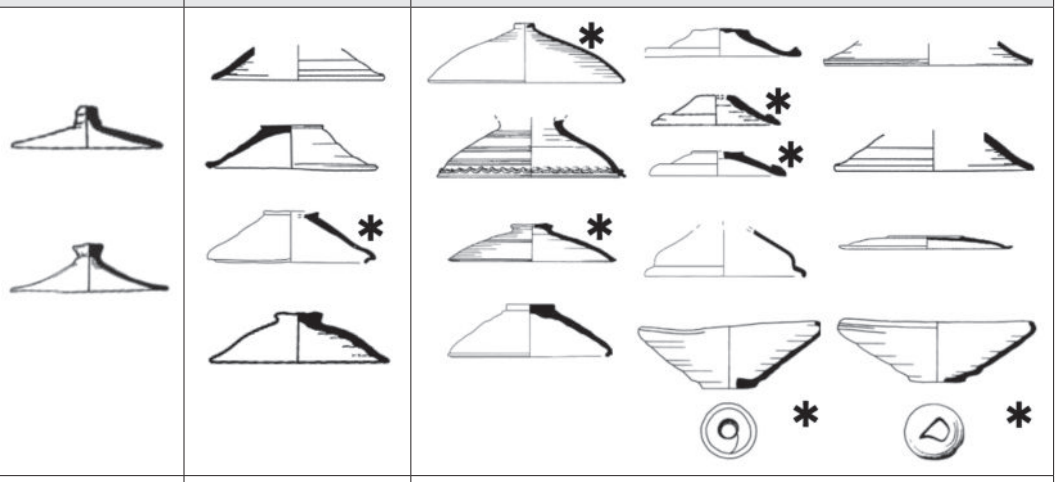
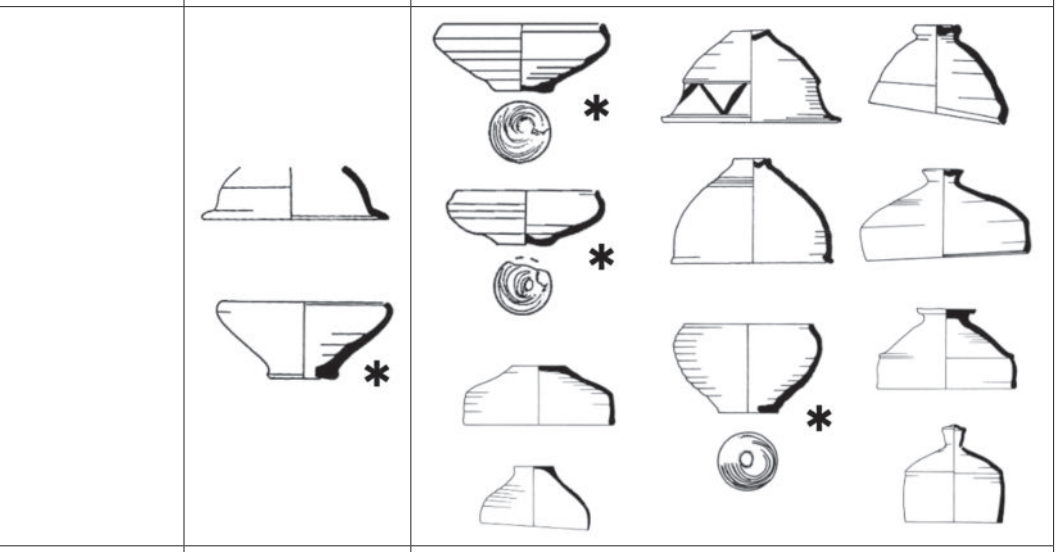
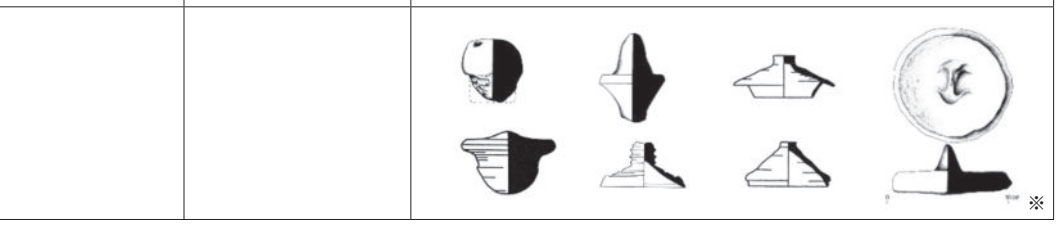
深手のフタは丸みを帯びた天井部に低いツマミを持つ。口縁部はほぼ垂直に、またはやや外反もしくは内湾しながら下がり端部は丸みを帯びている。天井部と口縁部の間に僅かに屈曲部を有する場合もある。深手型は壺と共伴する事例がクムラン（Qumran）で報告されている（Rasmussen 2011: 793, Figure 1）。

浅手のフタは全体に扁平な三角形状で、天井部に小さなツマミを持つ。口縁部端部は丸みを帯び、内湾するものや外反するもの、内面に僅かな返りを有するものがある。浅手型はキャセロールと共伴する事例がマサダで報告されているが（Bar-Nathan 2006: 187, Plates 32.19, 21）、口径の大きさによってはクッキング・ポット用と考える研究者もいる（Guz-Zilberstein 1995: 302; Tal 2006: 273, Figure 11）。ただし、クッキング・ポットがフタと共伴する事例はこれまでに報告されていない。

浅手と深手のフタは時に鉢や皿と分類されており、考古学者にとってそれらを見分けることは容易ではない。また、孔を穿ったものは、マサダ（Bar-Nathan 2006: 234, Plates 39, 10-14、特に13, 14）やイェリコ（Bar-Nathan 2002: 269, Plate 19, 308-309）からの事例のように漏斗として報告されるものもある。孔の形状はいずれも直径約1 cmである。図面からは孔が穿たれた時期が焼成の前後いずれなのか、また内外面のどちらから開けたのかなどは必ずしも明確ではない。

次に、ローマ時代に編纂されたミシュナに考古資料としてのフタの意味と役割を探る。

表 2　データベースに見るフタと同形の鉢の変遷（＊は有孔）

	Per-EH	H	ROM
浅手型			
深手型			
詰め込み型			

※　報告者はアンフォラ用の詰め込み型フタ（ストッパー）と想定。但し、共伴事例は無し（Bar-Nathan 2006: 217）

Ⅲ．ミシュナにおけるフタの意味

ミシュナはフタが穢れから容器の内容を守る重要な役割を持つとしている。

「以下の器は、しっかり締まった覆い蓋によって（同じ天幕下の死体の穢れから容器内のものを）防御するものである―糞製の器、石製器、（焼いた）土器、そして明礬製容器、魚骨製の、そしてその皮の、海にいる動物の骨の、およびその皮からの容器、また、木製の（常に）清い器―これらは、（しっかり締まった覆い蓋が）これらの容器の口にあろうと、これらの側面にあろうと、これらの底に座っていようと、これらの側面にもたれていようと、（同じ天幕下の死体の穢れから、器内のものを）防御する。…」（清潔の巻　ケリーム篇 10-1）（三好 1997: 27）

ここでミシュナに記された穢れと器の関係について整理しておきたい。穢れは 5 段階に分類できる（清潔の巻　トホロート篇 1-5 他）。もっとも強い穢れは「穢れの父たちの父」と呼ばれる「人間の死体」であり、「天幕形成によって人間と物」を穢す。その次は「穢れの父」と呼ばれる「人間、もの、死んだ這うもの」で、「穢れの父たちの父」との「接触によって人間と物」を穢す。その次は「第一級の穢れまたは穢れの子」と呼ばれ「穢れの父」によって穢された「人間、もの（液体）」である。食料と液体を

穢すが人間は穢さない。その次は「第二級の穢れ」と呼ばれ「第一級の穢れまたは穢れの子」によって穢された「食料」である。「献納物と聖別食料」を穢すが人間ともものは穢さない。最も軽度の穢れは「第三級の穢れ、または不適格」と呼ばれ「第二級の穢れ」によって穢された「献納物と聖別食料」である。なお、液体はいかなる等級の穢れと接触しても、第一級の穢れの保持者となる。

「木製器と皮製器、骨製器とガラス器は、平らなら浄い。しかし容器状ならば、穢れうる」（清潔の巻　ケリーム篇 2-1）（三好 1997: 5）が示すように、平らな形状や壊れて使えないものは「内部がない」（清潔の巻　ケリーム篇 2-3）ため清く、「容器状」（原文で「受け入れうるもの」）のものは常に穢れを受け入れる可能性がある。つまり、フタは容器状のものに対して用いられる。また、フタそのものも穢れを受ける可能性がある。

フタについては少なくともキスーイ（kisui）、ムグファ（mğufa）、ツァミード・パティル（ṣamid paṯil）と 3 種が記されている（表 4）。これらは文脈によって「覆い」、「蓋」、「栓」等と訳されるが、明確に使い分けられていない。このため、本稿ではそれぞれの型式としてより適当と思われる用語を漢字の原始義（藤堂 1969; 白川 1984）を参考にしながら試案として用いる。

Ⅳ. ミシュナに記されたフタ（表 3、4）

1. キスーイ～厹もしくは去（キョ）～

キスーイはもともと「覆いかぶせるもの」という意味である。甕や鍋といった多様な器に対してだけでなく、食べ物や葡萄酒を作るための踏み槽、手箱、たんすなどにも用いられた。キスーイ又はその変形が用いられているのは、以下の例文中の＊である。

「そして、すべての覆い（＊）は、湯沸かし器のもの以外は、清い。」（清潔の巻　ケリーム篇 14-3）（三好 1997: 37）

「手箱の覆い（＊）は穢れうる。たんすの覆い（同上）は清い。…」（清潔の巻　ケリーム篇 16-7）（三好 1997: 42）

「…日中に（食べ物に）覆い（＊）をかけていなかったならば、日没後に覆い（＊）をかけてはならない。（しかし日没前に）覆いをかけ（＊）、（安息日に入った後）覆いが外されたならば（再び）覆いをかけること（＊）が許される。」（季節の巻　シャバット篇 4-2）（長窪・石川 2005: 32）

器を本来の目的以外に使用することは穢れである。次の引用部分はフタを逆さまにして器として利用することを禁じるものである。

表 3　フタの出土例とミシュナから想定される名前

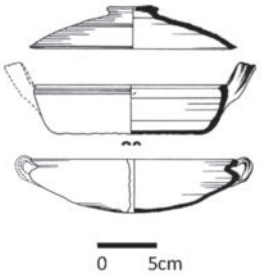
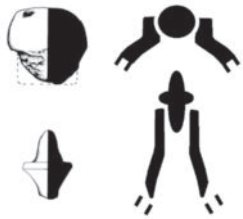
	出土例と使用イメージ	ミシュナでの記述例
浅手型	 キャセロールと共伴 （マサダ ; Bar-Nathan 2006: Plate 32.19, 21） 英語では Lids	כסוי（キスーイ） ＊シチュウ鍋のフタは有孔で天井部が尖っているものが良い。（清潔の巻　ケリーム篇 2-5） ＊但し、鍋以外にも同じ用語が用いられる。（清潔の巻　ケリーム篇 16-7 等） 厹もしくは去（キョ）？
深手型	 文書保管壺と共伴 （クムラン ; Rasmussen et al. 2011: Figure 1） ＊英語では Lids	מגופה（ムグファ） ＊壺のフタを手水器として使ってはいけない。（→壺のフタは手水器に似ている）（清潔の巻　ヤダイム篇 1-2） ＊壺（ムグファ）とセットで用いられることが多い（清潔の巻　ケリーム篇 9-1、ヤダイム篇 1-2 他） ＊壺の身と連結されていると見なされない。（→一体化して見える？）（清潔の巻　ケリーム篇 3-6） 厶（シュウ）？
詰め込み型	 壺等と共伴事例多数。 楔状は小瓶と共伴 （セフォリス ; Meyers & Meyers 2013: Plate 11.9） ＊英語では Stopper 0 5cm 身との共伴事例無し	צמיד פתיל（ツァミード・パティル） ＊身の口に詰めてしっかり締める。（清潔の巻　ケリーム篇 10-1） ＊粘土製の他、石灰や人糞製なども有り。（清潔の巻　ケリーム篇 10-2） 全（セン）？

表 4　ミシュナに見られる主なフタ

	ミシュナにおける例文（原文は筆者により追記）
כסוי （キスーイ）	・「すべての覆い（כל הכסויות）は、湯沸かし器のもの以外は、清い。」（清潔の巻　ケリーム篇 14-3）（三好 37） ・「手箱の覆い（כסוי）は穢れうる。たんすの覆い（כסוי）は清い。…」（清潔の巻　ケリーム篇 16-7）（三好 42） ・「ぶどう酒甕や油甕の覆い（כסוי）と、パピルス壺の覆い（כסוי חבייות）は穢れを受けえない。しかし、もしそれらを（容れ物としての）用途に応用するならば、それらは穢れを受けうるものとなる。シチュウ鍋（לפס）の覆い（כסוי）は、それに孔があいていて、（先が）尖っている限り、穢れを受けえない。もしそれに孔があいていないで、（先が）尖っていないならば、穢れを受けうる。なぜならば、彼女は、その中に野菜（の水分）を濾すことができるからである。」（清潔の巻　ケリーム篇 2-5）（三好 6） ・「・・こね鉢の破片はそれで水差しの口に蓋をするため（לכסות）、ガラスの破片はそれで瓶の口に蓋をするため（לכסות）・・」（祭日の巻　シャバット篇 17-5）（長窪・石川 70）
מגופה （ムグファ）	・「壺の栓（מגופת החבית）が緩んだか、（まだ）離れ落ちない場合・・」（清潔の巻　ケリーム篇 10-3）（三好 27） ・「（中ほどの硬さの）練り粉が・・それら（釜の銅底に見つかった針か或いは輪）が壺の栓（מגופת החבית）の中に見出される場合・・」（清潔の巻　ケリーム篇 9-1）（三好 23） ・「壺の栓（מגופת החבית）は、（壺とは）連結されていると見なされない。」（清潔の巻　ケリーム篇 3-6）（三好 9） ・「・・水を両手に注いではならない場合とは、…壺の栓（מגופת החבית）からもいけない。」（清潔の巻　ヤダイム篇 1-2）（三好 312） ・「彼は孔のあいた壺の栓（מגופת החבית）についても（以下のように）言ったであろう。・・」（清潔の巻　ケリーム篇 9-8）（三好 25）
צמיד פתיל （ツァミード・パティル）	・「以下の器は、しっかり締まった覆い蓋（צמיד פתיל）によって防御するものである。」（清潔の巻　ケリーム篇 10-1）（三好 27） ・「何によって、それらを（しっかり）締め回すのか。石灰で、ギブスで、泥で、ワックスで、粘土で、人糞で、モルタルで、土器粉で、そして粘着用になるすべてのもので…。締め回すことにならないのは、錫によっても、鉛によっても。その理由は、それは覆う（פתיל）ことはできるが、しかし、しっかり締める蓋（צמיד）にはならないからである。」（清潔の巻　ケリーム篇 10-2）（三好 27） ・「食料や飲料、そして（栓が）開いた土器。しかし、寝台や椅子、そして完全に栓がしてある（צמיד פתיל）土器は、清い。」（清潔の巻　トホロート篇 7-5、7-6）（三好 222-223）

表 5　ミシュナに見られる 2 種の鍋

	ミシュナにおける呼び名と例文（原文は筆者により追記）
ラパス （לפס）	考古資料としての キャセロール ・孔があいたフタ付 ・玉子を焼く、野菜を煮る。香辛料を入れる。 ・焜炉（כירה）の）上に載せて使う。 「シチュウ鍋（לפס）の覆いは、それに孔があいていて、（先が）尖っている限り、穢れを受けえない。もしそれに孔があいていないで、（先が）尖っていないならば、穢れを受けうる。なぜならば、彼女は、その中に野菜（の水分）を濾すことができるからである。」（清潔の巻　ケリーム篇 2-5）（三好 6） 「…最小の卵を割って平鍋（לפס）に載せて、その焜炉（כירה）の上で焼くに十分なほどに（その焜炉を）熱する時である…」（清潔の巻　ケリーム篇 5-2）（三好 12） 「（いくつかの土）鍋（לפס）があり、いつは他の中にあって、それらの縁（の高さ）が互いに等しい場合・・」（清潔の巻　ケリーム篇 10-8）（三好 29） 「・・沸騰している揚げ物鍋（לפס）または浅鍋（קדירה）を（竈から）おろしたならば、それらの中に香辛料（תבלין）を入れてはならない。」（季節の巻　シャバット篇 3-5）（長窪、石川 30）＊メコンメムレでは 3-4 「・・なぜなら地主は（わずかの煮野菜を）彼の鍋（לפס）から取り出して・・」（ペアー篇 8-4）（石川・三好 69-70）
キティラ （קדירה）	考古資料としての クッキング・ポット ・フタの記述は無い。 ・窯（תנור）に置いて使う。七輪（קלתות）の上に置いて使う。保温設備（דכון）に置いて使う。 ・3 本の支えを地面に設けてその上に置く。2 つの壺の上に置ける。 ・酵母が入る場合がある。香辛料を入れる場合がある。肉鍋がある。 「窯に置かれた鍋（קדירה）について。（死んだ）這うものが窯（תנור）の中にいても、鍋は清いままである。なぜなら、土器は容器を穢すことがないからである。（清潔の巻　ケリーム篇 8-4）（三好 21） 「三本の支え突起を地面に作り、それを粘土で連ねて、その上に平鍋（קדירה）を置くようにするもの。・・二個の石を焜炉（כירה）に作り、双方を粘土で結ぶと、穢れを受けうるものとなる。」（清潔の巻　ケリーム篇 6-1）（三好 16） 「七輪（קלתות）を下から熱すると、上にある鍋（קדירה）が熱くなるからである。」（清潔の巻　ケリーム篇 7-1）（三好 18） 「鍋（קדירה）受けを持つ保温設備（דכון）は、それが焜炉（כירה）との理由では、清いが、受け容器（כלי קיבול）との理由では、穢れうる。」（清潔の巻　ケリーム篇 7-2）（三好 18） 「・・肉（料理用）の鍋（קדירה של בשר）を結んでもよい。」（季節の巻　シャバット篇 15-2）（長窪・石川 62） 「鉢（קדירה）の中に落ちた献納物の酵母（תבלין של תרומה）と・・・・」（オルラー篇 2-14）（石川・三好 350） 「（・・沸騰している揚げ物鍋（לפס）または浅鍋（קדירה）を（竈から）おろしたならば、それらの中に香辛料（תבלין）を入れてはならない。」（季節の巻　シャバット篇 3-5）（長窪・石川 30）　メコンメムレでは 3-4 「・・だれも 2 つの壺（חבייות）を並べ、その上に鍋（קדירה）を置いてはならない。また薪で鍋を支えてはならない。」（季節の巻　ベーツァー篇 4-5）（長窪・石川 316） 香辛料を混ぜる鉢？（קדירה）（オルラー篇 2-15）（石川・三好 350）

「ぶどう酒甕や油甕の覆い（＊）と、パピルス壺の覆い（＊）は穢れを受けえない。しかし、もしそれらを（容れ物としての）用途に応用するならば、それらは穢れを受けうるものとなる。シチュウ鍋の覆い（＊）は、それに孔があいていて、（先が）尖っている限り、穢れを受けえない。もしそれに孔があいていないで、（先が）尖っていないならば、穢れを受けうる。なぜならば、彼女は、その中に野菜（の水分）を濾すことができるからである。」（清潔の巻　ケリーム篇 2-5）（三好 1997: 6）

この中でキスーイはシチュウ鍋（原文でラパス：lapas）と共伴している。ラパスがギリシア語のレパス（lepas、平らな貝を意味する）由来であれば、平らな調理鍋だろ

う。第Ⅱ項で述べたマサダからの出土例、すなわちキャセロールと共伴する浅手で小さなツマミに孔を穿ったタイプはこの記述と一致する。このフタはキスーイであり、天井部が有孔であることはフタとして清い状態といえる。

器と共伴していないが同様のフタはアナファ（Herbert 1997: Plate 19. PW168, PW177）、イェルサレム（Geva 2003: 237, Plate 6.3-17）、マサダ（Bar-Nathan 2006: 181, Plate 31-81）からも出土している。一部は漏斗（Bar-Nathan 2006: 234, Plate 39, 10-14、特に 13, 14）や鉢（Geva 2003: 169, 5.7-33）として報告されている。

なお、ミシュナにしばしばキティラ（qeḏira）というもう一つの調理鍋が記される（表 5）。キティラはギリシア語のキュトラ（chytra）に由来するのだろうか。ラパスが有孔のフタ付鍋で、玉子を焼く、野菜を煮る、香辛料を入れる、焜炉の上に載せて使う、といった脈絡で用いられるのに対し、キティラにはフタを用いた記述が無く、窯や七輪の上や保温設備、また地面に 3 本の支えを地面に設けた上や 2 つの壺の上に開口で置き、酵母や香辛料を入れたり、肉を調理したりした。3 本の支えの上で安定することから丸底と想定されるが、こうした形状は考古資料のクッキング・ポットに相当する。もしもこの仮説が正しければ、Ⅱ節で紹介した小型のフタをクッキング・ポット用とする仮説は否定されよう。

ただし、フタ付きのラパスに肉を調理した事例が見られず、フタ無しのキティラに肉を調理した事例がある点は疑問である。現在のユダヤ教の食の規定では、肉類と乳製品の混在は、たとえそれが湯気であっても固く禁じている（KOF-K Kosher Supervision 2012: 5-7）。当時も同様ならば、フタを必要とするのはむしろキティラのように思える。

ミシュナは「…しかし、壊れるなら、清い。それらから再び器を作るなら、その時点からそれ以後、穢れを受けうるものとなる…」（清潔の巻　ケリーム篇 2-1）（三好 1997: 5）と、壊れた器の断片を他の目的で使用することを固く禁じる。ところが、以下の記述は器の断片を条件付きでキスーイとして認めるものである。「安息日に動かしてもよいすべての用具については、それら（断片）が何らかの働きをする場合に限り、それらと共にそれらの破片を動かしてもよい。（例えば）こね鉢の破片はそれで水差しの口に蓋をするため（＊）、ガラスの破片はそれで瓶の口に蓋をするため（＊）。ラビ・ユダは言う。ただしそれら（破片）がそれら（本来）の仕事と似た働きをする場合に限る。（例えば）こね鉢の破片はその中にお粥を注ぎ込むため、またガラス（の破片）はそれらの中に油を注ぐため。」（季節の巻　シャバット篇 17-5）（長窪・石川 2005: 70）

通常ならば、安息日に働くことと本来の目的以外に器を再利用することの二重の規律違反を意味するはずだが、器の中身を保護することが最優先されたということであろうか。マサダでは土器片の一部を丸く整形したものがフタとして報告されており（Bar-Nathan 2006: 224, Plate 37. 38, 39）、キスーイとしての破片の再利用と考えられるかもしれない。エン・ゲヴでも同様に丸く整形した破片が出土している（牧野 2009: 135、図 4.7-24、145、図 4.12-8）。

キスーイの特徴を漢字で表現するならば厹もしくは去（いずれもキョ）が適当であろう。厹は凵と大を組合せたもので、飯器である凵にフタの形をした大が被さる様子である。去も厹と同様に本来フタを意味する。去という漢字には浅い器からフタを外すことで穢れを去らせるという意味があり、このことから「去る」として用いられるという（白川 1984: 180）。キスーイを表す用語として提案したい。

2. ムグファ～厹（シュウ）～

キスーイが調理器その他多様なものに用いられているのに対し、ムグファは主に壺（ハヴィート：ḥaḇit）に用いられている（ムグファト・ハ・ハヴィート：mĕuft ha-ḥaḇit）（以下の例文内の＊）。

「壺の栓（＊）が緩んだか、（まだ）離れ落ちない場合…」（清潔の巻　ケリーム篇 10-3）（三好 1997: 27）

「（中ほどの硬さの）練り粉が…それら（釜の銅底に見つかった針か或いは輪）が壺の栓（＊）の中に見出される場合…」（清潔の巻　ケリーム篇 9-1）（三好 1997: 23）

「壺の栓（＊）は、（壺とは）連結されていると見なされない。」（清潔の巻　ケリーム篇 3-6）（三好 1997: 9）

「…水を両手に注いではならない場合とは、…壺の栓（＊）からもいけない。また、自分の同僚（の両手に水を、自分の両手のひらを）窪ませて注いではならない。」（清潔の巻　ヤダイム篇 1-2）（三好 1997: 312）

これらの記述は、ムグファが壺と連結しているような形、もしくは掌を窪ませたような形状をしていた可能性を示唆している。このことは壺のフタと小鉢の見分け方という別の問題を提起するが、この点については別稿をご参照いただきたい（牧野 2016a: 108-110）。

クムランから出土した文書保管壺のフタは口縁部の端部が僅かに内湾、もしくは垂直に下降し、まるで壺と連結しているような深手型である（Pfann 2002: 164, Figure 11.1, 173, Figure 11.5）。上下を逆転すると小鉢に見える。マサダからの類似例には天井部に小さなツマミが付いているが、これは上下を逆転して器として使用することを避けるための工夫なのかもしれない。こうしたクムランやマサダからの出土例はミシュナに記されたムグファにうまく当てはまる。なお、前項において、「パピルス壺の覆い」がキスーイと記されているが（清潔の巻　ケリーム篇 2-5）、このうちの「壺」はハヴィオット（ḥaḇiyut）と、例外的

な表現である。今後の検討事項として留意したい。

なお、ムグファに穿たれた孔についての記述もある。

「彼は孔のあいた壺の栓（＊）についても（以下のように）言ったであろう、「（その孔の大きさの）基準は、オート麦の第二の節いっぱいの大きさである。（その孔が壺の栓の）真ん中にあるなら、（オート麦の第二節が）入る（ほどの大きさであり）、側面にあるなら、（オート麦の第二節が）入ることのできない（大きさである）」と。」（清潔の巻　ケリーム篇 9-8）（三好 1997: 25）

オート麦の第二節とは小穂の護穎の内側の小花であるとするならば、直径約 1 cm ほどである。なお、考古資料には直径約 1 cm の孔が穿たれたものがあるが、それらはフタとしてだけではなく「有孔の小鉢」（イェリコ ; Bar-Nathan 2002: 264, Plate 14. 204、イェルサレム ; Geva 2003: 160, Plate 5. 3-27, 174, Plate 5. 10-32, 233, Plate 6. 1-15, 235, Plate 6. 2-39, 40、マレシャ ; Kloner 2003: 81, Figure 6. 2-31、マサダ ; Bar-Nathan 2006: 149, Plate 25. 18, 19, 37、セフォリス ; Meyers and Meyers 2013: 59, Plate 1. 31）や「漏斗」（イェリコ ; Bar-Nathan 2002: 269, Plate 19. 308, 309 ？）として報告されている。報告書からは孔が焼成前に穿たれたかどうか、また、故意か破損かの判断が難しいものもある。詳細を明らかにするためには今後直接観察することが必要だが、他の用途としての再利用を防ぐためにあらかじめ、もしくは廃棄の過程で孔が穿たれたと解釈することもできる。

ムグファの特徴を漢字で表現するならば厶（シュウ）が適当であろう。その語源はフタを被せること、封じ込めることであり、象形文字の起源もフタそのものである。厶の下部に誓いの文書を入れる壺（白川 1984: 317）の口を意味する「口」を加えると合になり、合はフタと文書壺が隙間なく合う状況を表す。ムグファを表す用語として提案したい。

3. ツァミード・パティル～全（セン）～

ツァミード・パティルは糸で結んだ腕輪（パティールは紐や糸をツァミードは腕輪）を意味する。

「何によって、それらを（しっかり）締め回すのか。石灰で、ギブスで、泥で、ワックスで、粘土で、人糞で、モルタルで、土器粉で、そして粘着用になるすべてのもので…。締め回すことにならないのは、錫によっても、鉛によっても。その理由は、それは覆うことはできるが、しかし、しっかり締める蓋にはならないからである。」（清潔の巻　ケリーム篇 10-2）（三好 1997: 27）

末尾の「覆うことはできるが、しかし、しっかり締める蓋にはならない」は原文では「糸（パティル : paṯil）にはなっても腕輪（ツァミード : ṣamid）にはならない」である。錫や鉛のものはツァミード・パティルとしては中途半端で役に立たないという意味であろう。文脈からツァミード・パティルは石灰や粘土などを丸めただけの単純な作りで、すでに指摘されているように（Bar-Nathan 2006: 216; Magen 2002: 138-139）容器の口に入れて塞ぐストッパーであることが明らかである。

ツァミード・パティルは壺や器、窯にも用いられる。下記の例文の＊がその出現個所である。

「覆い蓋（＊）をしっかり締め回した酵母の（土）器が窯の中に置かれたが…」（清潔の巻　ケリーム篇 8-6）（三好 1997: 21）

「清い液体に満ちていて、その中に（金属製の）吸い上げ管がある壺が覆い蓋でしっかり締め回されているが（＊）…」（清潔の巻　ケリーム篇 9-2）（三好 1997: 23-24）

「覆い蓋でしっかり締め回された形になって（＊）窯の國に置かれた濾過土板の場合…」（清潔の巻　ケリーム篇 9-7）（三好 1997: 25）

「…しっかり締まった覆い蓋（＊）で（その内容を穢れから）防御するものである…」（清潔の巻　ケリーム篇 10-1）（三好 1997: 27）

「食料や飲料、そして（栓が）開いた土器。しかし、寝台や椅子、そして完全に栓がしてある（＊）土器は、清い。」（清潔の巻　トホロート篇 7-5、7-6）（三好 1997: 222-223）

「それが完全に栓がしてある（＊）壺であろうと、或いは、蓋が完全に閉まっている（＊）窯であろうと、さあ、それらは穢れている。」（清潔の巻　トホロート篇 8-1）（三好 1997: 225）

いずれも容器に詰め込むことでしっかりと密閉することを目的とするもので、考古資料としては粘土を丸めたボール状（アポロニア ; Roll and Tal 1999: 247, Fig. 5. 15-19、マサダ ; Bar-Nathan 2006: 224, Plate 37. 31-37）、楔状（セフォリス ; Meyers and Meyers 2013: 79, Plate 11. 9、マサダ ; Bar-Nathan 2006: 224, Plate 37. 42-44）、小水差用とされる駒状（セフォリス ; Meyers and Meyers 2013: 107, Plate 25. 7-14）、ディスク状（マサダ ; Bar-Nathan 2006: 223, Plates 36. 1-14, 37. 1-29）がこれに相当すると考えられる。このうち、特にボール状のフタはケリーム篇 10-2 に示された内容と合致する。小水差し用の中にはツマミに孔が穿たれた事例が見られる（セフォリス ; Meyers and Meyers 2013: 107, Plate 25. 8, 12, 14, 16）。なお、ディスク状で上部に小さなツマミが付くタイプは現時点では共伴事例が確認されていない。既述のようにアンフォラのフタという仮定が今後確認されればツァミール・パティルとして分類できるだろう。

ツァミード・パティルを漢字で言い表すならば、「栓」

から木偏を外した「全」（セン）が適当と思われる。全は入れこむことを意味する「入」とその下部である3つの玉が連なる形「王」から構成される（藤堂 1969: 801）。つまり「全」は3つの連なる玉を入れ込むためのフタということであり、ツァミード・パティルを表す用語として提案したい。

4. その他の蓋

考古資料との関連性が掴めないものとしては、エスタ・クレイ（'śutha klei）やクフィカ（kfiqa）がある。「容器を作る意図がない限り、人はそれから干しイチジクを食べるために樽（ハヴィート）を割ってもよい。また樽の栓（エスタ・クレイ）に穴をあけてはならない。また、樽の胴部にも穴を開けてはならない。」（季節の巻　シャバット篇 22-3）（長窪・石川 2005: 82）や、「そして、ぶどう酒と油の皮袋の場合には、（穢れを受けることができなくなるほどの破れ孔の大きさの）基準は、その皮袋にある大きな栓（クフィカ）ほどである」（清潔の巻　ケリーム篇 17-12）（三好 1997: 46）は、それぞれ土器以外の容器のフタかもしれない。

なお、セフォリスでは数点がパテラ（Patera：手水器）のフタとして報告されている（Meyers and Meyers 2013: 129, Plates 36. 3-8）。

V. まとめと今後の課題

以上、土器資料のうちのフタを発掘報告書に基づくデータベースから考古資料としての傾向を把握し、ミシュナから使用者の視点を取り入れながら整理した。

ミシュナから読み取れるフタは少なくともキスーイ、ムグファ、ツァミード・パティルと3種類に分類され、それぞれが覆う、被せる、嵌め込むといった異なる機能と形態を備えていたようだ。考古資料に対する使用者の視点としてこうした情報を取り入れるならば、キャセロールと共伴する浅手のフタは厹（もしくは去）、文書保管壺と共伴する深手のフタは厶、壺や香油瓶に詰め込むセンは全と解釈できる。なお、今回は土器製のフタを中心に分析を進めたが、ミシュナには器の素材について糞製、石製、木製、魚と獣の皮や骨や糞、ガラス、ミョウバン、未焼成の粘土、焼成した粘土と多様であったことを記している（清潔の巻ヤダイム篇 1-2、ケリーム篇 2-1、10-1 等）。個別のフタの素材は明記されていないが、実際にはこれら3種のフタに土器以外の素材も含まれる可能性があることを記しておきたい。

考古資料としてのフタは共伴物を伴わない場合、器との区別が容易ではない。しかし、ミシュナが器を本来以外の用途に使うことを禁じていることからすると、当時の人々はフタと器を厳密に区分していたに違いない。ミシュナはツマミや穿たれた孔から判別できる可能性も示唆している。器の底部としては成立しないほど小さく安定が悪いもの、また穴が穿たれているものはフタの可能性が大きい。

上記の観点を含めてデータベースの結果を捉えなおすと、3種のフタいずれも有孔のものはローマ時代に顕著である。ムグファとツァミード・パティルは特にローマ時代には形状が多様化し、特にツァミード・パティルは以前から存在したボール状や楔状に加え、ディスク状なども新たに出現する。既述のように今回入力したデータはユダ地域と北部にやや偏るため、これらの傾向は同時に地域性を示すものかもしれない。

ここで、いくつかの課題が残る。まずフタに穿たれた孔の解釈についてである。孔はいずれも天井部の中央に穿たれており、報告書から判断する限り自然に破損したのではなく故意に開けられた、もしくは焼成前にあらかじめそのように作られたように見える。ケリーム篇 2-5 が示すように孔が調理中の穢れを避けるための工夫であるならば、焼成前に穿ったと考えられる。しかし、「土器を清くする（破れ孔の大きさ）の基準」を厳密には「オリーブほどの大きさ」（約 1.5 cm）とするなど（清潔の巻　ケリーム篇 3-1）、ラビ達はミシュナにおいて器を再利用させないため、破損部の大きさについて再三議論している。このことから、廃棄時に孔が穿たれたものと解釈することもできる。この点については、直接資料を観察することによって今後確認したい。また、外面と内面に仕上げの違いや受部である底部端部内側の摩擦痕などの使用痕についても併せて今後の検討課題としたい。これらは鉢とフタの明確な分類基準とも関係するものであり、このこと無しにはフタの型式編年を確立することも困難である。

もう一つの課題は断片の扱いである。加工した土器片の出土例はパレスティナでは珍しくないが、その多くが錘や機織り用の錘と解釈されてきた。断片をキスーイとして再利用する記述（季節の巻　シャバット篇 17-5）は、フタとの関連性について検討する必要を示している。

考古学者は自身の文化的枠組みを越えて出土物を理解するまでになかなか至らないが、ミシュナは使い手の視点を我々に提供してくれる。今回の研究はこれまで十分に研究されてきた考古学資料についても使い手の視点から再調査することで新しい発見に繋がる可能性を示唆している。今後は実地調査も含めながら研究を重ねていきたい。

本研究は文部科学省科学研究費助成事業　基盤研究（A）研究課題名「ユダヤ・イスラーム宗教共同体の起源と特性に関する文明史的研究」（課題番号 25257008：研究代表者　市川裕）の助成によって行った。

参照文献

Bar-Nathan, R. 2002 *Hasmonian and Herodian Palaces at Jericho. Final Reports of the 1973–1987 Excavations. Vollume III: The Pottery.* Jerusalem, Israel Exploration Society.

Bar-Nathan, R. 2006 *Masada VII. The Yigael Yadin Excavations 1963–1965 Final Reports. The Pottery of Masada.* Jerusalem, Israel Exploration Society.

Berlin, A. M. 1997 The Plain Ware. ix-246. In S. C. Herbert (ed.) *Tel Anafa II, i*. Ann Arbor, Kelsey Museum of the University of Michigan.

Finsy, D. A. and J. R. Strange (eds.) 2015 *Galilee in the Late Second Temple and Mishnaic Periods Vols. 1 and 2.* Menneapolis, Fortress Press.

Fisher, M. 1989 Hellenistic Pottery (Strata V-III). In Z. Herzog et al (eds.), *Excavations at Tel Michal,* 177-187. Minneapolis and Tel Aviv, The University of Minnesota Press and The Sonia and Marco Nadler Institute of Archaeology, Tel Aviv University.

Garfinkel, Y. and S. Ganor (eds.) 2009 *Khirbet Qeiyafa Vol.1 Excavation Report 2007–2008*. Jerusalem, Israel Exploration Society.

Geva, H. (ed.) 2003 *Jewish Quarter Excavations in the Old City of Jerusalem. Vol. II. The finds from Areas A, W and X–2*. Jerusalem, Israel Exploration Society.

Guz-Zilberstein, B. 1995 The Typology of the Hellenistic Coarse Ware and Selected Loci of the Hellenistic and Roman Periods. In A. Belfer-Cohen et al. (eds.), *The Excavations at Dor, Final Report Volume IB. Areas A and C: The Finds,* 289-434. Qedem Reports 2. Jerusalem, The Institute of Archaeology and The Hebrew University of Jerusalem in cooperation with The Israel Exploration Society.

Herbert, S. C. (ed.) 1997 *Tel Anafa II, i*. Ann Arbor, Kelsey Museum of the University of Michigan.

Herzog, Z. et al. (eds.) 1989 *Excavations at Tel Michal*. Minneapolis and Tel Aviv, The University of Minnesota Press and The Sonia and Marco Nadler Institute of Archaeology, Tel Aviv University.

Khan, G. et al. (eds.) 2013 *Encyclopedia of Hebrew Language and Linguistics. 4 vols.* Leiden/Boston, Brill.

Kline, M. 2005 *Shisha Sidre Mishnah.* (in Hebrew) http://chaver.com/hebrew%20index.html.（2013 年 10 月 10 日閲覧）

Kloner, A. 2003 *Maresha Excavations Final Report I. Subterranean Complexes 21, 44, 70*. Jerusalem, Israel Antiquities Authority.

KOF-K Kosher Supervision (compiled by Rabbi M. D. Lebovits) 2012 *Halachically Speaking Vol. 8–4.* Shema Yisrael Torah Network Jerusalem. http://www.shemayisrael.com/parsha/halacha/（2014 年 3 月 20 日閲覧）

Magen, Y. 2002 *The Stone Vessel Industry in the Second Temple Period*. Jerusalem, Israel Exploration Society and Staff Officer of Archaeology.

Mechon Mamre 2002 *Shisha Sidre Mishnah.* (in Hebrew) http://mechon-mamre.org/b/h/h0.htm.（2013 年 10 月 10 日閲覧）

Meyers, M. and C. L. Meyers (eds.) 2013 *Sepphoris I: The Pottery from Ancient Sepphoris*. Winona Lake, Eisenbrauns.

Pfann, S. J. 2002 Kelei Dema': TITHE Jars, Scroll Jars and Cookie Jars. In G. J. Brooke and P. R. Devies (eds.), *Copper Scroll Studies*, 163-179. Journal for the Study of the Pseudepigrapha Supplement Series 40. New York, Sheffield Academic Press.

Porat, P. et al. (eds.) 2015 *Herodium: Final Reports of the 1972–2010 Excavations Directed by Ehud Netzer, Volume I, Herod's Tomb Precinct*. Jerusalem, Israel Exploration Society.

Roll, I. and O. Tal (eds.) 1999 *Apollonia-Arsuf. Final Report of the Excavations vol.1*. Tel Aviv, Tel Aviv University.

Singer-Avitz, L. 1989 Local Pottery of the Persian Period (Strata XI-VI). In Z. Herzog et al. (eds.), *Excavations at Tel Michal. Israel,* 115-44. Minneapolis and Tel Aviv, The University of Minnesota Press and The Sonia and Marco Nadler Institute of Archaeology, Tel Aviv University.

Tal, O. 2006 *The Archaeology of Hellenistic Palestine: Between Tradition and Renewal.* Jerusalem, The Bialik Institute, Jerusalem. (in Hebrew)

The Hebrew University in Jerusalem (n.d.) *Otzer katuvi talmudim.* (in Hebrew with English introduction and acknowledgements) http://jnul.huji.ac.il/dl/talmud/.（2015 年 7 月 1 日閲覧）

石川耕一郎（訳）　1987『ミシュナ　ペサヒーム』　エルサレム文庫。

石川耕一郎・三好　迪（訳）　2003『ミシュナ　Ⅰ　ゼライーム』　教文館。

西アジア文化遺跡発掘調査団・大畠　清（編）　1966-70『テル・ゼロール：西アジア文化遺跡発掘調査団報告書』全 3 冊　日本オリエント学会。

白川　静　1984『字統』　平凡社。

長窪専三・石川耕一郎（訳）　2005『ミシュナ　Ⅱ　モエード』　教文館。

日本ユダヤ学会　2007「ヘブライ語カナ表記委員会　2008 年 1 月ヘブライ語カナ表記方法とその用例答申」　http://www.waseda.jp/assoc-jsjs/hyouki.html（2015 年 11 月 17 日閲覧）

藤堂明保　1969『漢字語源辞典』　學燈社。

三好　迪（翻訳・監修）　1997『タルムード　6　トホロートの巻』　三貴。

牧野久実　2009「ヘレニズム時代の土器」月本昭男ほか（編）『エン・ゲヴ遺跡』119-166 頁　リトン。

牧野久実　2011「エン・ゲヴ遺跡出土のヘレニズム土器～2009 年度再 59 発掘 H 地区資料を中心に」『オリエント』54 巻 1 号　158-181 頁　日本オリエント学会。

牧野久実　2016a「口縁部が内湾する小鉢に関する一考察～考古資料とミシュナの記述から～」『史学』86 巻 3 号　101-118 頁　三田史学会。

牧野久実　2016b「古代パレスティナにおける魚醤の利用」小川英雄先生傘寿記念献呈論文集刊行会（編）『古代オリエント研究の地平』149-166 頁　リトン。

牧野久実　2016c「ペルシア～ヘレニズム時代の土器」杉本智俊・間舎裕生（編）『イスラエル国エン・ゲヴ遺跡 2009 年度～2011 年度調査報告』289-306 頁　慶應義塾大学西アジア考古学発掘調査団。

牧野 久実
鎌倉女子大学教育学部
Kumi MAKINO
Faculty of Education, Kamakura Women's University